

## おのおの京をめざしつつ

「週末寸言」原稿 20090411

「つつじヶ崎の／月さやか  
／うたげを尽くせ／明日より  
は／おのおの京を／めざしつ  
つ／雲と興れや／武田武士」  
（作詞・米山愛紫）。「ご存知、  
ご当地ソング「武田節」の最  
終節である。武田武士が目指  
すのは、当地甲斐の国の繁栄  
などよりも、むしろここを踏  
み台にして「京」に上ること  
だ、とこの民謡は謳うのであ  
る。いつの日か故郷に錦を飾  
らんと、青雲の志を胸に秘め  
て「京」をめざしてふるさと  
を後にする。甲斐の国の若者  
にとって、これはごくごく標  
準的な青春の「巣立ち方」で  
もあった。そして人々はこの  
歌詞に賛同してか、酒席に蚤  
声を張り上げて40年、この  
民謡をこよなく愛唱してきた。

から、青雲の志を持って「京」  
に雄飛することの大切さが少  
なからず説かれたことでもあ  
ったろう。ここに言う「京」  
とは、今では京都ではなく「東  
京都」なのだ。  
かくて、彼らの去った後の  
「ふるさと」は、年寄りばか  
りの超高齢化社会となってい  
く。この状況は、あたかも果  
樹王国山梨の果実たちが太田  
市場に出荷されるとき、これ  
ら実を育てたふるさととの地味  
も一緒に東京に流出していく  
のによく似ている。大地にと  
って地産地消が豊かな循環を  
作り出すように、人間の地産  
地消も終わりになき循環型社会  
の基盤であろうというのにな  
ある。  
私事にわたって恐縮だが、  
筆者が40年前「ふるさと」  
に舞い戻ってきたときに、多  
くの友人知己から「せっかく  
小仏峠を越えて出て行ったの  
に何で帰ってきたのか？」と、  
まるで新種の渡り鳥でも発見  
されたかのように素朴に尋ね  
られたのを思い出す。  
地域の学校で学んで、地域  
の職場に就職し、そこから世  
界を股にかけて活躍する。「お  
おの甲斐をめざしつつ、雲  
と興れ」と謳う「新武田節」  
はどうだろう。